Japanese Association for Religious Studies

致する。

史的ダルマは王子の達磨多羅やダルマトラータでない、インドですでに「外国人僧」で有る可能性を排除しない。ヒントはヤヴァナの海路でなく、ペルシャ系商人が行き交う陸路にある。『二入四行論』[6]の「壁観」は四念処批判、繰り返される第一人称の「我」の語法に、「史的ダルマの告白」が聴かれる。「報怨行」は、仏説三行への「庭前」を構成する。

(1)『落陽伽藍記』水経注（平凡社）、『落陽伽藍記校釈』（周祖、科学出版社）一三頁以下。(2)関口真大『達磨の研究』（岩波書店）、「結語」の三六七頁以下。(3)拙著『理解社会学のコンプレメンタリズム』試論（法政大学『多摩論集』二〇〇八年）。(4)マックスウェーバー『理解社会学のカテゴリー』（海老原・中野訳、未来社）七七頁以下。(5)Yoshiko Oshima（大島淑子）、*Zen—Anders Denken?. Zugleich ein Versuch über Zen und Heidegger*, Verlag Lambert Schneider, Heidelberg 1985. S. 53ff., 83ff. (6)柳田聖山編『達摩の語録』（禅の語録1、筑摩書房）三一頁以下。同『ダルマ』（講談社）参照。

起塔を通した永遠の釈尊の感得

——『法華経』のブッダ観——

鈴木隆泰

『法華経』（*Saddharmapuṇḍarīka*）のブッダ観としては、「仏舎利塔（ストゥーパ）」「『法華経』そのもの」「『法華経』の法師」に加え、「如来寿量品」に説かれる、いわゆる「久遠実成の釈尊」という、無量の寿命を有する釈迦牟尼仏が有名である。これらのうち、前三者はそれぞれ「塔／遺骨」「経巻」「法師」という具体的な対象を通してブッダを直接的に確認・感得することができるのに対し、最後の「久遠実成の釈尊」については、古来『法華経』の中心思想の一つと見なされてきたにも関わらず、「如来寿量品」が具体的な記述を欠いていたこともあり、その確認法・感得法に関する学術的考察は、管見による限りほとんど行われてこなかったように思われる。しかるにこの度『法華経』の教説を再検討した結果、『法華経』に散見される「起塔」に関する記述が、無量の寿命を有する釈尊の確認法・感得法の具体的教示となりうる可能性が浮上してきた。

『法華経』には仏塔に関する記述が随所に存在しており、先行研究はそれらを「(一)仏舎利塔の建立・供養を勧奨するもの」、「(二)仏舎利塔の供養を禁止し、仏舎利なしの塔の建立を勧奨するもの」、「(三)多宝塔と如来の分身に関するもの」の三種に大別している。これらのうち、(一)と(三)は他の先行研究の考察結果に譲ることとし、本研究では専ら、「如来神力品」「法師品」「分別功徳品」に見られる(二)に関わる記述を辿ることによって、当該可能性の検証作業を行った。以下に検証結果を提示する。

『法華経』は仏舎利塔（ストゥーパ）と仏舎利なしの塔（チャイトヤ）を明確に区別した上で、『法華経』実践の場にストゥーパではなくチャイトヤを建立せよと繰り返し命じている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

『法華経』の実践とチャイトヤ建立によって、その場に如来の全身が実現されるため、仏舎利を納めたストゥーパの建立は不要であり、むしろ、『法華経』実践の場に建立されたチャイトヤこそが真のストゥーパであると主張している。そこには、「ストゥーパ＝ブッダ」という伝統的仏塔信仰の基本理解を踏襲した上で、価値の中心を『法華経』の実践へとシフトさせようとする意図が看取され、ここにわれわれは、「『法華経』の実践＋チャイトヤ建立＝真のストゥーパ建立＝如来の実現」という〈『法華経』のブッダ観・仏塔観〉を確認することができる。さらに興味深い点は、実現される如来がそれまでは三人称視点で漠然と表示されていたのに対し、「分別功徳品」においては一人称視点で「私」（＝話者である釈尊）と記され、『法華経』の実践とチャイトヤ建立を通して実現し感得される如来が、他ならぬ釈尊その人であることが表明されていることである。

『法華経』はブッダ観の展開上、それまで広く認められていた「永遠のブッダ」という観念を、歴史的存在である釈尊に重ね合わせることによって、釈尊を歴史的限定から解放して永遠性を付与するとともに、説法の場に顕現されるブッダに歴史性を与える役割を果たしたとされるが、当の「如来寿量品」自体は「永遠の釈尊」を感得する方法の具体的記述を欠いていた。一方、「如来寿量品」の直後に位置する「分別功徳品」は、「如来寿量品」の教説を引き継ぐものであることを自認するとともに、実現される如来が釈尊自身であることを示している。これらを総合すると、「『法華経』において釈尊の永遠の現存は、『法華経』の実践とチャイトヤ建立によって感得される」との結論が導かれる。『法華経』が実践され、その場にチャイトヤが建立される限り、釈尊は時間的・空間的限定から解き放たれて常に説法の場に顕現し、衆生はその永遠の現存をいつでも感得することができる。『法華経』においては、「『法華経』の実践」と「チャイトヤ建立」は不可分に結びつきながら、永遠の釈尊を感得するための手段、方法ともなっていたのである。

『大毘婆沙論』成立の諸問題

三友健容

漢訳された『婆沙論』には三種類ある。『鞞婆沙論』（十四巻『鞞婆沙論』）、『毘婆沙論』百巻（現存六十巻）、『大毘婆沙論』二百巻である。三訳の対応関係について(A)十四巻『鞞婆沙論』は六十巻『毘婆沙論』『大毘婆沙論』の要約である。(B)独立した『毘婆沙論』であるという意見に別れ、その成立の先後関係についても未だ定説を見ていない。

六十巻『毘婆沙論』と『大毘婆沙論』は「五百羅漢」の「釈」「造」とあるから、五百羅漢の解釈であり、『鞞婆沙論』には帰敬偈と「尸陀槃尼撰」とあり、最初にあるべき膨大な量の「雑犍度」が省略され、「結使犍度」の「四十二章十門」からはじまっているから、「四十二章十門」の根本論の「収録流通本」であるという見方が妥当であり、『鞞婆沙論』はそれら『婆沙論』から撰したものということになろう。しかし重要なこと

NII-Electronic Library Service